

「主体的に学習する児童の育成」 道徳科における対話的な学びをつくる授業の工夫

I 研究の内容

1 主題設定の理由

新学習指導要領では、「育成すべき資質・能力」として、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力 人間性等」の三つに整理し、その実現のためには、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」が行われることが必要であるとしている。

3つの学びは、それぞれが分けられるものではなく、他の2つの学びにもつながっている。そこで、今年度は、昨年度同様「対話的な学び」に着目し、その実現のための研究をさらにすすめることで主体的に考える児童像を目指すこととした。平成29年3月に新学習指導要領が公示され、次年度より全面実施となるが、道徳については、平成27年3月に「特別の教科 道徳」（以下「道徳科」）として位置づけられ、小学校では平成30年度から全面実施された。改訂の社会背景には、深刻ないじめ問題やグローバル化、情報化の急速な進展、少子高齢化の進行、科学技術の進歩など、児童をとりまく社会や地域、家庭の変化があげられる。また、児童の自尊感情の低さや規範意識の低下、コミュニケーション能力の低下なども問題視されている。そのような中、道徳教育は道徳科を要しこれまで大切にしていた指導内容に加え、現代的な課題等に対応すべく「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため道徳的諸価値についての理解をもとに、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」ことを目標とし、答えが一つでない道徳的課題を児童一人一人が自分自身の問題ととらえ、向き合う「考え、議論する道徳」への転換を図ろうとしている。一人一人が、道徳的価値の自覚のもと、自ら、考え、他者と対話し協働しながら、より良い方向を目指す資質、能力を備えることが重要であり、こうした資質、能力の育成に向け、道徳教育の研究を進めていくことは重要であると考え。

これまでの研究の成果を土台として、道徳科において自分の考えを広げる「対話的な学び」をつくる学習活動の工夫をさらに図っていく。理解したことを他者に説明したり、他者の話を聞いて新たな知識を得たりなど多様な表現による「対話的な学び」の充実を図ることが、児童が身につけた知識や技能を定着させ、物事の多面的なより深い理解に至る。そして、習得した知識や技能を活用して、問題解決に向けた探究活動に効果的に結びつけていく。このような自分の考えを広げ深める「対話的な学び」をつくる学習活動を通して、知識や経験を「自分のもの」とし、学ぶ意義を見だし学習への達成感を味わうことで、より主体的に学習する児童の育成につなげていきたい。

2 研究の具体的な内容と方法

(1) 研究内容

- ・「対話的な学び」から学びをより確かに、より深くするための授業検討と実践。
- ・地域の力を授業に活用できる場面の開発。

(2) 研究方法

- 「対話的な学び」から学びをより確かに、より深くするための授業展開を検討し、実践する。
- 地域の力を授業に活用できる場面の開発をする。

【授業づくり・授業改善】

- ① 「対話」を通した学びをつくり、自分の考えを広げ深める力を育成する授業づくりの研究
- ② 授業の構造化 指導案の書き方

【学級・集団づくり】

- ① Q-Uを活かした児童理解と学級集団作りの研究
- ② 個の力を伸ばし建設的な集団をつくるために、児童が主体となって行う活動の研究

【保護者・地域との連帯】

- ① 家庭学習への取り組み方法や保護者への啓発
- ② 学校支援ボランティアとの連携

3 研究実践

(1) 研究授業 第4学年 道徳科「雨のバス停留」(C-規則尊重)

授業者 前島 国学

指導・助言 峡東教育事務所指導主事 中村 英彦先生

(2) 一人一実践

1年生「いっしょにかえろう」(B-友情・信頼)

授業者 相澤 由佳

2年生「みほちゃんとなりのせきのますだくん」(B-友情・信頼)

授業者 渡邊 由美子

3年生「楽しめばすきになる」(A-希望と勇気, 努力と強い意志)

授業者 志村 克人

5・6年生「ブランコ乗りとピエロ」(B-相互理解, 寛容)

授業者 三森 美礼

II 成果と課題

1 成果

- ・ 多面的・多角的な考えを引き出すには授業者の工夫や、子どもたちの考えをつなぐコーディネーター力が必要であるが、難しさもある。研究することで再度認識し意識できたことは成果であると思う。また、対話的な学びを作る授業の工夫では、少人数という実態から、考えが偏り、考えが広がらないという面があるため、さらなる工夫が必要だと感じた。
- ・ 教科化となった道徳についてどのように進めていくのか、研究の方向が定まらなく不安もあったが、研究の方向性や内容について総合教育センター主査・指導主事山田陸子先生を招いて学習会を行い指導して頂いたことは、共通理解を図ることができ大変有意義であった。その後の研究につながり大きな成果となった。
- ・ 一人一実践を行い、お互いに授業を見合うことで、授業改善につながると感じた。学年の発達段階や、教師の考えさせたい課題設定から、価値項目が同じであっても切り口が違っているので、自分の授業展開の引き出しが増え、学び合いが深められたと思う。道徳の授業を高めあうためにも、一人一実践は大きな成果であったと思う。

2 課題

- ・ 子どもたちの道徳的な判断力・心情・実践意欲を育てるため、授業の展開や授業の形態の工夫もあと感じた。また、今年度は評価について詳しく研究できなかったため、来年度は研究の視野を広げ研究を進めていく必要がある。
- ・ 対話的な学びについては、教師と児童、児童同士、自分自身と対話をさせるなど授業展開の中で意識したが、対話から、議論につなぐには、教師の発問や問い返しなどの工夫が必要だと感じた。また、授業形態の工夫の必要性を感じた。

III 成果物

- 1 研究授業指導案
- 2 一人一実践の指導案
- 3 児童の道徳意識調査
- 4 家庭学習に関するアンケート等の資料 (研究主任 相澤由佳)